

長白山や鏡泊湖といった主な観光資源を視察した他、渤海国遺跡を訪れて今後の観光開発の可能性を探った。延吉、琿春、牡丹江は何度か訪問したことはあるが、観光という観点での調査、そして観光の専門家に同行する形での調査であったため、これまでとは違った目で、現地を見ることができた。

長白山

長白山は、総面積19km²の長白山自然保護区にある休火山で、頂上に天池と呼ばれる火口湖があることで有名だ。図們江や鴨緑江、第二省松花江の源流がある。中国の名山の中では標高2,749mの最高峰である。

延吉市内のホテルを朝7時30分に出発し、260kmほど離れた長白山までの所要時間は約4時間。道路の状況も比較的良好で、マイクロバスの中でも快適に過ごすことができた。数年前に長白山を訪れたことがあるという同行者は、道路の整備状況に驚いていた。前に行ったときは、道路の状況がひどく、もう二度と長白山には行きたくないと思ったほどだと言う。今回は仕事だから仕方がないと覚悟を決めてきたものの、あまりの快適さに拍子抜けしたようだ。また、道路の両脇に植えられていたさまざまな花も綺麗で、私たちが和ませてくれた。

途中、休憩に立ち寄ったところは、蜂蜜や米、きのこなどの現地の特産品が並べられ、観光客の買い物スポットとなっていた（写真1）。延辺朝鮮族自治州を訪れる観光客の6割、延吉を訪れる観光客の9割が韓国人であるとのことだが、ここでも例に漏れず、私たち以外はほとんどが韓国人の買い物客であった。

長白山の麓に到着し、マイクロバスから四駆車に乗り換えて、頂上を目指す。観光客向けにランドクルーザーが待機し、頂上まで送迎してくれる（写真2）。既に旅行社を

中国東北地域の観光可能性調査

ERINA調査研究部研究員 川村和美

国土交通省北陸地方整備局による日本海横断国際フェリー航路開設可能性調査の一環として、2003年9月10日～16日に中国東北地域の観光資源と開発の可能性を探る北東アジア観光研究会の調査団に同行する機会を得た。この調査では、吉林省の延吉・琿春、黒龍江省の牡丹江を訪問した。

表1 延辺朝鮮族自治州の外国人旅行者受入数

単位：人

	1990		1995		1999		2000		2001	
外国人旅行者総数	9,920	(100.0)	103,848	(100.0)	77,252	(100.0)	148,178	(100.0)	167,296	(100.0)
韓国	9,580	(96.6)	99,238	(95.6)	61,472	(79.6)	117,198	(79.1)	101,355	(60.6)
日本	254	(2.6)	1,956	(1.9)	2,303	(3.0)	2,965	(2.0)	2,372	(1.4)
ロシア	0	(0.0)	415	(0.4)	4,529	(5.9)	25,721	(17.4)	59,166	(35.4)
米国	46	(0.5)	298	(0.3)	1,019	(1.3)	991	(0.7)	489	(0.3)

(出所)『延辺統計年鑑2002』より作成

表2 延吉市の外国人旅行者受入数

単位：人

	1998		1999		2000		2001		2002	
外国人旅行者総数	23,671	(100.0)	37,008	(100.0)	84,287	(100.0)	77,678	(100.0)	72,962	(100.0)
韓国	20,067	(84.8)	32,835	(88.7)	77,576	(92.0)	74,034	(95.3)	67,763	(92.9)
北朝鮮	366	(1.5)	338	(0.9)	414	(0.5)	328	(0.4)	415	(0.6)
日本	1,827	(7.7)	1,941	(5.2)	2,751	(3.3)	1,990	(2.6)	3,120	(4.3)
ロシア	138	(0.6)	492	(1.3)	1,856	(2.2)	370	(0.5)	683	(0.9)
米国	578	(2.4)	744	(2.0)	984	(1.2)	500	(0.6)	602	(0.8)

(出所)『延吉統計年鑑2003』より作成

通じて送迎料金（200元程度）は支払った上で、現地のガイドさんに「安全運転をしてもらうために、少し（50元以上の）お金を渡した方がいい」と耳打ちされた。スピードを出し、乱暴な運転をする車に、観光客が「お金をあげるから安全運転で！」とお金を渡したのがこれのきっかけのようだ。「安全運転をするとチップがもらえる」ではなく、「乱暴な運転をするとそれを怖がって客はお金が払う」と理解したのが、正規の料金に上乘せしてお金を渡さなければならない状況となっていた（実際に私たちもお金を支払ったがかなりのスピードでの運転で怖かった）。こういったやり方には不快感を覚えた。こんなことを続けていけば、リピーターの獲得にはつながらず、観光の発展も望めないのではないだろうか。

山頂にもっとも近い駐車場まで車で移動した後は、天池を見下ろせる山頂まで自分の足で歩かなければならない（写真3）。ここでは、最大傾斜45度のかかなり急な坂道を30分ほど登る。階段も手すりもない上、足元は滑りやすく、登るのに苦労した。ここを訪れる観光客は年輩の方が多いため、このままでは危険を伴うのではないかと感じた。手

すり代わりのロープをはるだけでも、ずいぶん楽に登れるようになるだろう。

苦労してやっと山頂にたどり着くと、目の前に吸い込まれそうなほど美しい「天池」が広がった（写真4）。この日は晴天で、緑がかった青色の素晴らしい天池に感動した。この地域では晴天の日が年間90日程度で、何度訪れても天候が悪く、霧がかかっていて、天池を見ることができない人も多いと聞いていた。今回、美しい天池を見ることができた私たちは本当にラッキーだった。

この天池の美しさは素晴らしい観光資源である。加えて、落差68mの東北地域最大の滝である長白瀑布（写真5）や、長白山頂が噴火したときにできた山の斜面の噴火口跡に広がる森林、谷底森林など観光にふさわしい自然資源はある。これを十分に活用し、観光客をひきつけ、リピーターを増やすためには、こうした資源を支える周りの設備・サービスの充実が必要である。お客様が安全で気持ち良く過ごせるサービスの提供が大きな課題となろう。また、長白山の入山期間は基本的に6月1日～9月15日であるため、オフシーズンの観光客の誘致対策も求められるところだ。



写真1 長白山へ行く途中で立ち寄った休憩所兼土産売り場



写真2 頂上までの送迎を担当するランドクルーザーの待機所



写真3 頂上から見おろした山頂の駐車場。坂道を自分の足で登る



写真4 長白山天池



写真5 長白瀑布

鏡泊湖

黒龍江省牡丹江市にある鏡泊湖は、牡丹江の上流域に位置し、1万年前の噴火によって牡丹江が遮られてできた湖である。豊かな自然に囲まれており、避暑地としても有名な場所だ。

あまり時間がなく、遊覧船に乗るなどの湖の楽しみ方はできなかったが、湖畔のホテルに宿泊したことでその景色は十分に楽しめた。朝、早めに起床し、湖の近くを歩いてみた。湖にはうっすらと霧がかかっていたが、時間とともにその霧も晴れ、朝日に湖面がきらきらと輝いて素晴らしい景色だった。鏡泊湖の周囲には、吊水楼瀑布（写真6）や朝鮮族瀑布村などがあり、こちらも主要な観光資源となっている。



写真6 吊水楼瀑布

鏡泊湖へは地元の人々も時々訪れると聞いた。地元の人が何度でも訪れたいような観光資源は、当然他地域の人々の心もひきつけられることだろう。そして、地元の人がその観光資源を大切に思っていることが、周辺環境の整備につながっていくのだと感じた。

渤海国遺跡

牡丹江には渤海時代の都城跡である渤海国上京龍泉府遺址や石灯籠が残る興隆寺（写真7）、渤海時代に関する展示がなされている工字庁などがあり、観光地の一つとなっている。牡丹江市としてはこれらをさらに整備し、総合的な国際レベルの渤海国遺跡パークとして開発していきたい考えもあるようだ。

琿春にも渤海時代の遺跡があるとのことで、その地を訪問してみた。行ってみると、石碑があるだけ、あるいは城壁だったあとが確認できるだけという程度のものであった。こちら側の遺跡はまだ発掘されておらず、それを観光資源とするには長期間を要するものであった。琿春の地でも渤海遺跡を発掘し、観光資源として活用することも考えられるが、それよりも先にやらなければならないことがあるように思える。実際、延辺州政府、琿春市政府としても遺跡の発掘は、地方政府が決められることでなく、積極的に開発したいという意識ではなさそうであった。渤海国についてはその歴史認識など複雑な問題があることも事実である。こうした状況からみれば、今ある観光資源の整備とそれを取り巻く環境整備を進めたい考えとのことだった。



写真7 石灯籠が残る興隆寺

サービス・ホスピタリティー

琿春を出発し、車で牡丹江へ向かう途中、昼食をとるために立ち寄ったレストラン（ホテルの食堂）は、ごんまりとしていたが、掃除が行き届きとても清潔で、従業員達も笑顔で迎えてくれた。手を洗いに行くとおしぼりを渡してくれるなど、その心遣いがとても嬉しかった。これだけで、料理も数倍おいしく感じられた（実際、とてもおいしかった）。

このホテルは豪華な設備があるわけではなく、特別なものは何もない。ただ、清潔感と従業員の態度が素晴らしかった。別の街のあるホテルでは、こちら側を無視して私語に

夢中の従業員がいたり、極端に無愛想であったり、決して感じのいいものではなかった。地方の小さな町のホテルであったが、印象はよく、機会があればぜひもう一度立ち寄りたと思った。

このホテルで受けたサービスが1週間の調査を通じて最も印象に残っている。サービス、ホスピタリティー、人との出会いも大きな観光資源となると感じた出来事だった。

観光の発展に向けて

2003年9月から、日本人が中国を訪れる際の観光ビザが不要となった。そのため、今回の調査は初めてビザなしで中国を訪れることができた。面倒な手続きを省くことができ、とても便利になった。気軽に中国に行けるという状況は、中国への日本人観光客の増大につながるものと期待できる。

さて、今回、観光という観点から延吉・琿春・牡丹江を巡って感じたことは、この地域には観光資源はあるが、それを活用し、観光客を呼び込むにはその周辺環境を十分に整備する必要があるということだ。

長白山、鏡泊湖に代表されるような素晴らしい自然資源はある。また、国境であるということ自体が観光資源になる。加えて、民族の歴史や文化、習慣などを活かした民族観光（エスニック観光）も考えられる。

ここに観光客を誘致するためには、その観光資源（自然資源）を保護という意識を持ちながら整備し、観光客が利用しやすい環境を整えることが必要である。例えば、長白山の山頂までの坂道に、景観を損ねるような豪華な階段を作る必要はないが、歩きやすいように手すりとなるロープを張るといったことである。これはそれほどお金のかかることではないが、観光客にとってはとても助かると思う。

もちろん、ホテルやレストラン、土産売り場、道路の途中での休憩所などの周辺施設も必要である。これは施設を作るだけでなく、それを清潔に保つこと、そこで働く従業員の教育を徹底することも重要である。気持ちのいいサービスを受ければ、その地域の印象も良くなり、また来たいと思えるものだ。なお、個人的には清潔なトイレがあることも嬉しい要素だ。

せっかくの観光資源も知られなかったら何にもならない。延辺朝鮮族自治州政府や黒龍江省政府・牡丹江市政府との意見交換を行った際に、「長白山の日本での知名度は？」、「鏡泊湖は日本でどれくらい知られているか？」と聞かれたが、ほとんど知られていないというのが答えであると思う。知らなければ、行ってみたいと思わない。長白山を訪れる観光客は韓国と中国南部の人々が多い。そこ

が朝鮮民族にとっての聖地であるということが韓国人観光客が多い一つの要因ではあるが、それに加えて韓国や中国南部地域でPR活動を頻繁に行っているためことも旅客の増大につながっていると言う。日本から、そして世界から観光客を誘致するためには、興味を持たせ、行ってみたいと思わせる仕組み、PRが重要である。

今回訪問した地域は、いずれも数年前に初めて行った時に比べると、急速に整備が進んでいるように思う。観光開発の可能性は十分にある地域であるだけに、それを活かせる周辺環境の整備が期待される。